

堀川

かくれ
産業・土木
遺産

東海道最大の宿場町から熱田港へ 七里の渡し

七里の渡しは宮宿から桑名宿まで船で渡る東海道で唯一の海上路であった。その距離が七里(約28km)であったことからそう呼ばれた。満潮時には沿岸に浮かぶ島を縫うように、干潮のときは沖まで小舟で行き帆かけ舟に乗って旅をした。宮宿は中山道垂井宿と結ぶ脇往還の美濃街道、三里の渡しの佐屋宿への佐屋街道の起点ともなり、二つの本陣と最盛時248の旅籠が並び、尾張藩の迎賓館となる東浜御殿と西浜御殿も設けられていた。

熱田湊は安政5年(1858)に米・英・仏・蘭・露5か国と結ばれた通商条約により開港した五港からは外れた。明治初めに港湾整備が行なわれ熱田港になり、堀川も浚渫されたが、熱田港の沖合は遠浅のため、大型船は四日市港に寄港し、運ばれた貨物を小型船に積み替えて熱田港や堀川上流まで回漕せざるをえなかった。明治27年末に県議会で熱田築港(現:ガーデンふ頭)の建議がなされ、明治29年2月に浚渫工事に着工、足かけ12年にわたる大工事がスタート、幕末の五港の開港から遅れること約半世紀後の明治40年11月、名古屋港の開港と共に港の役目を終える。

現在は七里の渡し公園として昔の面影も復元され、船着き場も整備されて、観光船の発着や、堀川まつりなどで賑わいの復活をめざしている。



七里の渡し公園 現在の様子

誕生と現・港新橋への変遷

港新橋

堀川
かくれ
産業・土木
遺産

- ▲ 船が通航する現在の港新橋
- ◀ 「開き橋」のある汎太平洋平和博覧会を機に完成した旧・港新橋

明治40年の名古屋港開港に伴い、埋立て地の東築地と西築地には工場や商店、住宅ができ、多くの人が往来するようになり、そのあいだの堀川には、渡し船が大正7年から昭和7年まで運航されていた。

大江川運河計画が縮小され、大江川に架かる開橋の可動橋を港新橋仮橋東岸に移設し、大型船通行のために開き橋もある仮橋が昭和7年に開通、そして昭和12年に開催された汎太平洋平和博覧会*を機に旧・港新橋は完成した。

戦後の高度成長による国道1号の混雑緩和のため、名四バイパス(豊明~四日市)が計画され、昭和33年に着工。伊勢湾台風の被害を乗り越え、一部では防潮堤を兼ねさせるために強化され、昭和47年に全通した。一方、昭和39年には現・港新橋が開通し、開き橋の不便さが解消されたが、懐かしい風景も消えていった。

この橋は歩道が併設されており、橋上から遺構が見られ、港付近の景観は素晴らしく、隠れた観光スポットになっている。名四バイパスは、現在国道23号(豊橋~四日市)の一部となった。

* 汎太平洋平和博覧会:百万都市になった名古屋市は、名古屋港北の臨海地域で国際的な博覧会の開催を決め、「名古屋汎太平洋平和博覧会」とした。昭和12年3月15日から5月31日まで78日間の会期で開催され、それに合わせて大規模な都市開発が行われた。